

第四節 古墳時代

古墳時代のはじまり

弥生時代にはじまった稲作を中心とする農業社会は、古墳時代になると、技術と用具の進歩によって、生産力は著しく向上していった。余った生産物や労働用具は、共同体の共有の財産として管理され、分配され、また、水田の経営や拡張といった作業は、共同体全員が共同してあたったものとおもわれる。人々は、一定の土地に定着して生活することが要求され、個人的行動は制約されるようになった。人々の生活行動が、稲作の順序と共同体のきまりに従って動いていくようになったのである。このような共同体のなかでの水田経営や農作業の割りふり、手順などには、当然のことながら、経験に富んだ指導者が必要であった。このような指導者は、稲作に限らず祭りなど共同体内部のいろいろな行事や共同体同士の争いなどに際しても軍事的・宗教的な指導者となっていた。そしてやがて彼らは、共同体の余剰生産物や共同の所有であった農具の管理や分配の権限も握るようになり、ついには共同体の支配者としての権力を確立していったのである。彼らは、前節でも述べたように、同一墓域に複数の埋葬がなされた集団墓ではなく、一人びとりの個人墓へ埋葬されるようになっていった。高い盛土をもった個人墓（古墳）が出現する直前の墳墓は、弥生時代後半ごろには、すでにあらわれていたらしい。三次市矢谷墳墓^{やだに}や庄原市田尻山墳墓^{たじりやま}（図2-4-1）、広島市西願寺遺跡C・D地点などでは、共同墓のなかにあっても、構造、規模、副葬品などで他の墳墓とは違った内容をもつものがあらわれている。矢谷墳墓は、丘陵尾根の自然の高まり部分を削り出し、盛土をほどこした墳墓で、墳形は前

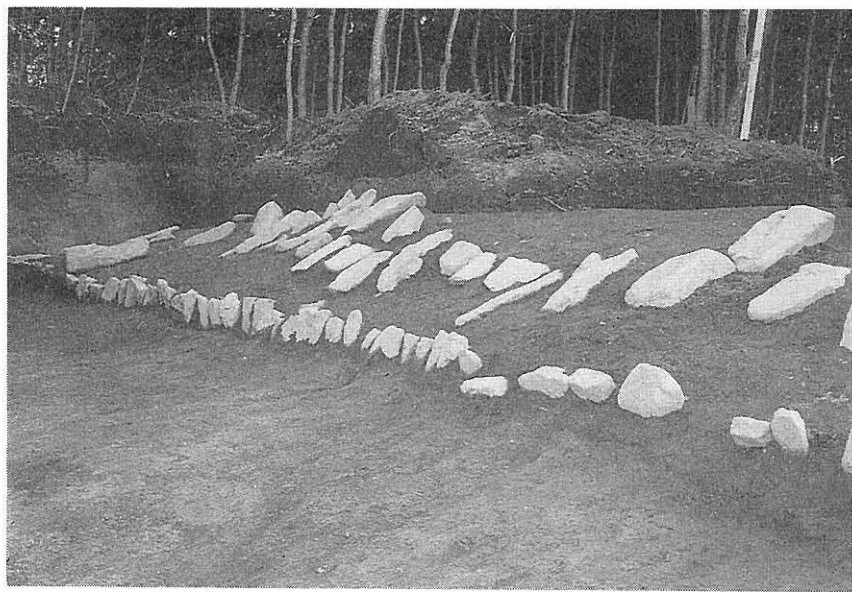


図2-4-1 田尻山墳墓、墳丘裾石列

方後円形をなしている。四隅には突出部をつくり出しており、全長一八・五メートルの規模をもち、周囲には、浅い溝がめぐっている。墳丘裾に列石があり、下方斜面には貼石をめぐらして墓域を区画している。内部施設は、後方部中央の二段土墳墓を中心にして、箱形木棺、箱式石棺、土墳墓など一一基から構成されている。中央の土墳墓（第五号主体）からは、ガラス玉、管玉が出土し、土墳上面からは、墓標とみられる角礫群とともに鼓形器台、壺、注口付壺、高坏などがみつかった。また、周溝からは、供献祭祀に使ったとおもわれる丹塗りの特殊器台、特殊壺、鼓形器台、高坏、甕、壺などが出土している。これらの土器は、特徴からみて山陰や吉備文化の強い影響を受けて製作された土器群とされるものである。なかでも特殊器台は、吉備弥生文化圏の中核と密接な関連をもっていたことを表わすものである。『広島県教育委員会『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』一九八一年』 広島市西願寺C地点遺跡は、太田川に向ってのびる丘陵尾根上の平坦

部に造営された墳墓で、上手の部分を溝で区切ってほぼ長方形に区画して墓域を定めている。内部主体は、一四基の土壙墓と四基の堅穴式石室から構成されている。これらの埋葬施設の上面に盛土が存在したかどうかは明らかでないが、一面に河原石が敷かれており、この石の間から袋状鉄斧一点が出土し、また、第四号土壙墓の上面からは、底部に穿孔のある壺や高坏、器台形土器などがみつかつている。

広島県教育委員会『西原寺遺跡群』一九七四年

つては、墳丘上および周溝などから供献祭祀用の土器が出土することが多く、このころの墳墓が死者を埋葬する墓であると同時に、地域の共同体の人々と神とを結ぶ祭祀の場所でもあったことをしめしている。このような墳墓から高塚墳墓（古墳）へ発達する過程については、まだ明らかでないところが多いが、これらの墳墓に葬られた共同体の指導者たちが他の共同体との統・廃合を繰り返しながら、しだいにその権力を強め、やがては古墳に祀られるような一地域の支配者となっていくたものであろう。そして、このような支配者の権力を象徴するものとして最初に造られた古墳が前方後円墳であったと推測され、畿内では三世紀末ないし四世紀はじめには出現したようである。

前方後円墳は、わが国独特の形態のものであり、おそらくは、後円部の埋葬の場と前方部の祭祀の場を結びつけることによって成立したものとおもわれる。近藤義郎『前方後円墳の時代』一九八三年 前方後円墳は、はじめは共同体（地域）の指導者の埋葬の場であったと同時に祭祀の場として重要な位置をしめていたと考えられるが、その後、指導者たちが、しだいに共同体の祭祀権と支配権を掌握してくるにつれ、その権力の固定と増大によって権力を世襲化し、継承していくための墳墓に性格を変えていき、自らの力を誇示し象徴するものとして築造されるようになっていったと考えられる。

したがって古墳は、規模、構造などからみても一般民衆の墓ではなく、それは共同体の指導者といった特定の

権力をもった人物の墓であった。このことは、古墳築造にあたっては、相当の時間と労働力をつぎこんだ土木工事が必要であったことや遺骸と一緒に埋納された副葬品に被葬者の生前の権威を象徴する鏡、玉、剣などの宝器が多くみられることから推測できる。また、古墳は、はじめのころから全国的にはほぼ共通した形態、構造をもっていることがしられている。これは、古墳の被葬者が、中央の政治権力（大和政権）と深い結びつきをもっていたことを表わすものであり、国家的にある程度統一された組織ができあがっていたことをしめしていると推測される。

古墳が築かれた時代は、古墳時代と呼ばれており、三世紀末ないし四世紀はじめごろから七世紀までの間続いた。この間には、古墳も形態や内部構造、副葬品に変化がみられ、被葬者の性格も地域の司祭者的性格から権力者としての王へ変っていったことがうかがわれるし、また、副葬品からは、畿内の大和政権と地方の支配者との間の結びつきに差が生じてきたこともしられるところである。

このように古墳時代は、弥生時代に芽生えた支配者が、その地位を確立した時代であり、統一国家に向う日本が大きく揺れ動いた時代でもあった。また、大陸との交渉もさかんになり、大陸文化が政治・文化に強い影響を及ぼした時代でもあったのである。

四世紀の古墳

広島周辺において高い盛土をもった古墳が築かれるのは、畿内地方にくらべるとやや遅く四世紀後半のころと考えられる。太田川流域で、いまのところ最古の古墳とみられるものには、広

島市なかおだ中小田第一号古墳、宇那木山うなぎやま第二号古墳、神宮山じんぐうやま第一号古墳などがある。中小田第一号古墳は、標高約一〇メートルの太田川に向かってのびる丘陵尾根上に築かれた古墳で、全長約三〇メートル、高さ約四メートルの前方後円墳とみられている。埋葬施設として、後円部の頂部に竪穴式石室がつくられている（図2-4-2）。石

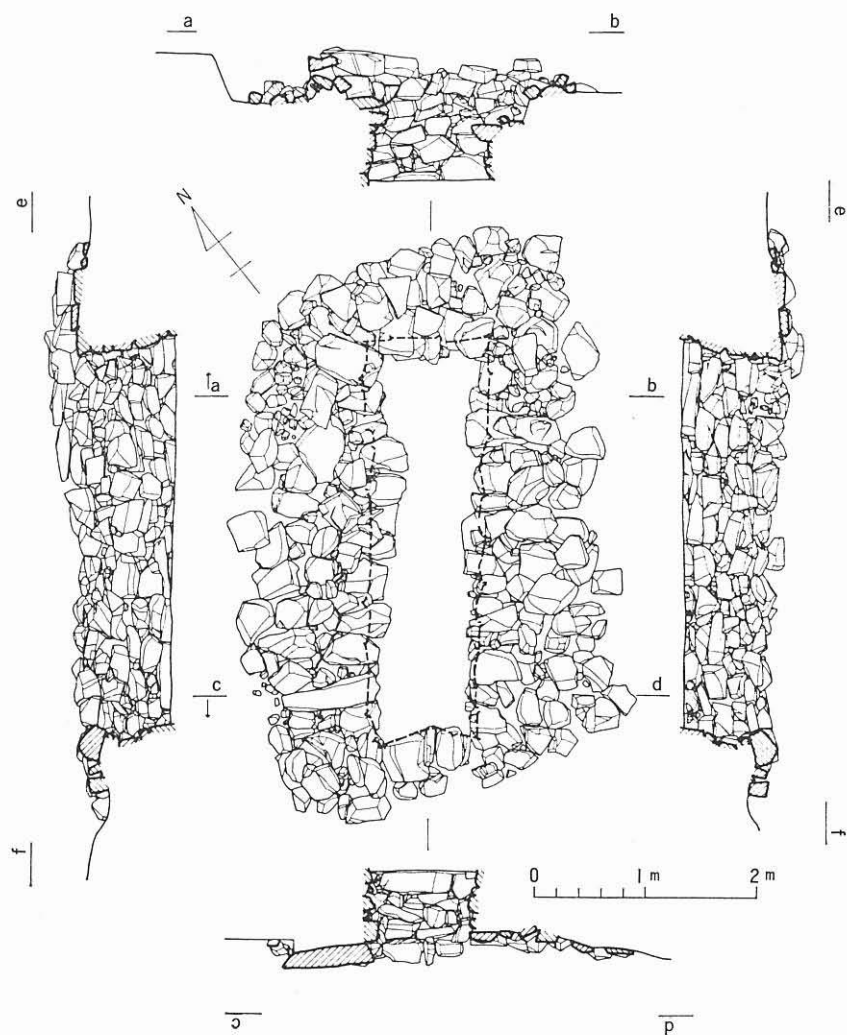


図2-4-2 中小田第1号古墳の竪穴式石室(『中小田古墳群』1980年より)

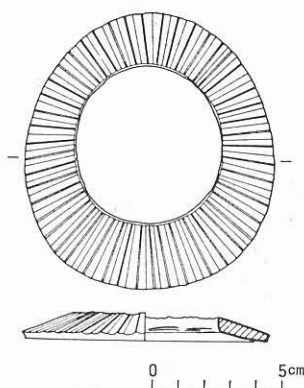


図2-4-3 中小田第1号古墳出土の車輪石
(『中小田古墳群』1980年より)

三角縁神獸鏡は、吾作銘四神四獸鏡で直径二〇・一センチ、縁高〇・九センチで「吾作明竟甚大巧……」の二八文字からなる銘文が鮮明に鑄出されている。中国三国時代の魏から伝来したものとわれ、京都府椿井大塚山古墳(二面出土)、大阪府万年山古墳、福岡県石塚山古墳出土鏡と同じ鑄型で鑄造されたものである。椿井大塚山古墳は、長さ一八五メートルの前方後円墳で、埋葬施設の堅穴式石室からは多数の三角縁神獸鏡、鉄製武器、工具類が発見されている。三角縁神獸鏡のなかには、関東から北九州にまで分布する多くの同範の鏡が含まれており、大塚山古墳がその中心にあるところから、この古墳が畿内の大和政権の中核にあった権力者の墓であろうと推定されている小林行雄『古墳時代』一九六一年の研究。このように椿井大塚山古墳出土鏡と中小田古墳出土鏡が同範の関係にあることは、中小田古墳の被葬者と椿井大塚山古墳の被葬者との間には、同盟ないし服属の関係があり、その証として鏡が配布されたものとみられている。このことからすると中小田古墳の被葬者は、四世紀後半ごろに、太田川下流域から広島湾頭一円を治めていた支配者であったと推定される。

宇那木山第二号古墳は、太田川右岸の丘陵先端部に位置する全長約四二メートルの前方後円墳と考えられる。

室は、長さ三・五メートル、幅約一メートル、高さ一・メートルの規模がある。石室床面から朱の付着した木片がみつかつており、組合式木棺が埋納されていたものである。また、石室中心部から三角縁神獸鏡と獸帯鏡の二面の銅鏡や凝灰岩製車輪石(図2-4-3)、勾玉三、管玉三〇、そろばん玉五が出土し、さらにその少し北西よりから短冊形鉄斧一、袋状鉄斧一などがみつかつている。広島市教育委員会『中小田古墳群』一九八〇年

埋葬施設は、後円部頂部北よりに築かれた竪穴式石室で、全長約三メートル、幅一メートル、高さ一メートルの大きさがあり、中から中国・三国時代に製作された環状乳画文帯神獸鏡一面、管玉一が出土しており、四世紀後半に築造されたものと考えられる。神宮山第一号古墳は、太田川右岸の標高九二メートルの丘陵尾根上にあり、全長が約三〇メートルの前方後円墳と考えられている。埋葬施設は、後円部とみられる墳丘頂部の地山を掘りこんでつくられた竪穴式石室で三基がみつかった。A主体の石室は、北端に位置し、長さが二・九メートルで内部から鉄剣、鉄鏃片、ガラス小玉、管玉が出土している。B主体は埋葬の中心となる石室とみられ、なかから内行花文鏡片、そろばん玉、管玉、ガラス小玉などがみつかった。また、C主体の石室からも勾玉、管玉、そろばん玉、ガラス小玉が発見されている。内行花文鏡は、中国・後漢代に製作されたものといわれている。この出土鏡片は、破損したものに二つの小孔を穿って垂飾品にしたものとおもわれる。出土遺物や石室の構造からみて四世紀後半には築造されたものと推定される。

このほか、西願寺D地点遺跡も四世紀代の墳墓と考えられる。高い盛土はもたないが、太田川に向かってのびる丘陵尾根上に位置し、二基の竪穴式石室と一基の箱式石棺から構成されている。石室は、長方形の大形の墓壇の中に河原石を使ってつくられており、内部から鉄剣、鉄鏃、刀子、鉄斧、ノミ、タガネ、鉋など多数の鉄製品がみつかった（図2-4-4）。なかでも鉄斧は、方形の袋部をもった鋳造品で、上部には二本の隆帯が鋳出されている。形態は、中国の青銅斧に共通する特徴をもっており、大陸からの輸入品とおもわれる。石棺は、河原石で囲まれた墓壇の中につくられており、床石には一部朱が残っていた。

このように太田川下流域では、四世紀後半になってから高塚古墳が築造されはじめている。これは、畿内の政治勢力との同盟ないし服属の関係をもつことが他の地域にくらべて遅れたことをあらわしているようである。ま

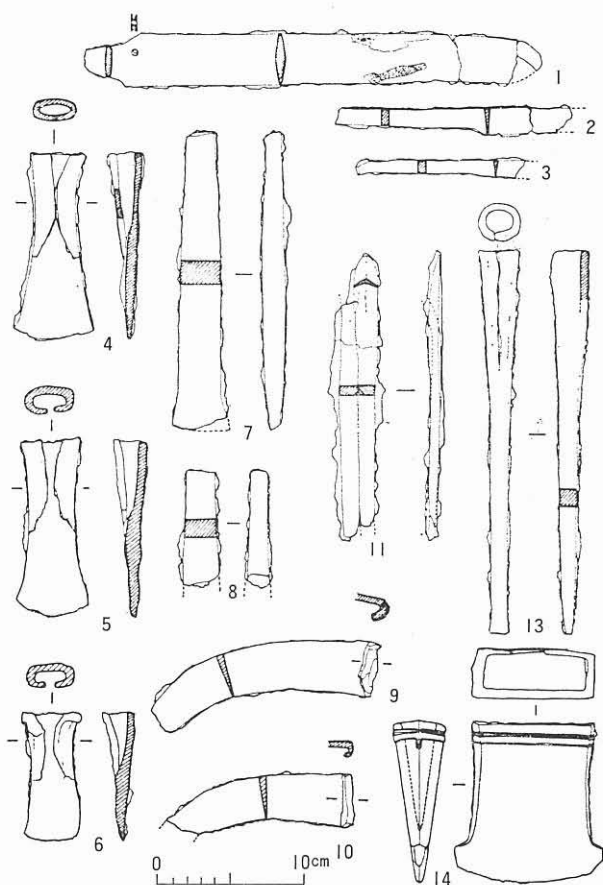


図2-4-4 西願寺遺跡出土の鉄器(『西願寺遺跡群』1974年より)

る。しかし、三角縁神獸鏡の所有や鉄製品の副葬が立つことは、この地域が畿内大和政権の国家統一の過程で内海交通の要衝として重要な位置を占めていたからにちがいないからである。

五世紀の古墳

五世紀代になると、農業技術は一段と進歩した。人々は、新しく形成された沖積平野の広大な原野や台地上を積極的に開拓し、耕作地にしていた。これには、人工的に灌漑を行って用排水路、井堰などを整備することが必要であった。このような水利工事には、新たに登場した鉄製の土木工具や

た、古墳の規模や構造をみると、小型のものが多く。これは、太田川下流域が水田としての可耕地が狭いことによる生産力の低さによって、大きな古墳を生み出すだけの権力をもった支配者が出現しなかったからであらうとおもわれ

農具が使われるようになってきた。これまでの石器や木器にかわる鉄製の鍬、鋤、馬鍬、斧などの普及は、広い荒地の開墾を容易にしていた。また、耕地の乾田化、すなわち稲の生育期には水をはり、収穫期には水を落して乾燥させる方法は、土地を肥沃化し、生産力の飛躍的な増大をもたらした。各地の支配者は、その生産力を基盤に、地域での政治的権力を強め、そしてその権力を誇示するために大きな前方後円墳や帆立貝式古墳をつくりはじめたようになった。古墳の副葬品も四世紀代の呪術的、宝器的なもののに代って多くの鉄製武器・武器、国産（仿製）の銅鏡、滑石製模造品などといった葬送儀礼的な性格のものが目立つようになってきた。さらに副葬品でみると、中央の古墳と地方の古墳とは、質・量ともに差が生じはじめてきた。これは、中央の支配者と地方の支配者との関係に差がでてきたことをしめしており、中央の政治権力のもとに各地の支配者をまとめた全国的な国家としてのまとまりができあがってきたことをあらわすものであろう。そしてまた、こうした国家（倭国）は、対外的にも中国、朝鮮とさかんに交渉をはじめ、その結果、大陸の新しい文化や技術が伝来し、わが国の政治や文化に大きな影響を及ぼしてきたのである。

太田川下流域における五世紀代の古墳では、広島市中小田第二号古墳、上小田古墳、弘住第一号、第三号古墳、空長第一号古墳、須賀谷古墳などがあげられる。

中小田第二号古墳は、第一号古墳の上手の丘陵上に位置する直径一五メートル、高さ二・五メートルの円墳である。内部主体は、堅穴式石室で、全長は三・一メートル、幅〇・八メートル、高さ〇・八メートルの大きさがある。石室内から素文鏡や三角板鋌留短甲、横矧板鋌留衝角付冑、大型刀、大型剣、蛇行剣形鉄製品、有棘猪形鉄製品、鉄鍬などの武器類（図2-4-5）、刀子、摘鎌、鎌、大型鎌片、斧、袋鑿片、小型鑿片などの農具類が出土しており、五世紀後半の築造と推定される。

広島市教育委員会『中小田古墳群』一九八〇年

古墳の位置や副葬品の量・質からみて

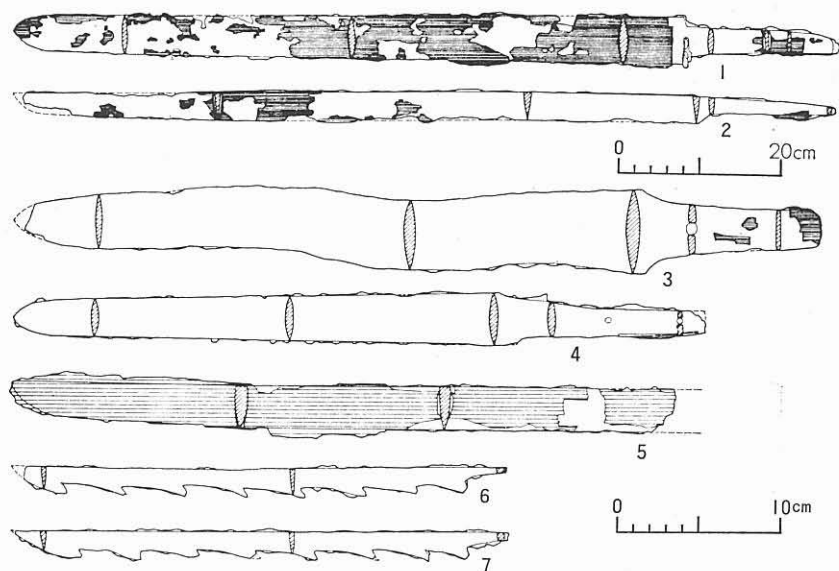


図2-4-5 中小田第2号古墳出土の鉄器(『中小田古墳群』1980年より)

中小田第一号古墳の被葬者に連なる人の墓と考えられる。副葬品としての多量の鉄製品は目立つが、古墳の規模、構造は第一号古墳と比較して貧弱である。また、弘住古墳群は、前方後円墳である第一号古墳を中心に五基の古墳で構成されている。第一号古墳は、太田川左岸に向かってのびる丘陵尾根上に位置した全長約四〇メートルの前方後円墳で、後円部には葺石がみられる。埋葬施設などについては、未発掘のため明らかでないが、形態からみて四世紀末ないし五世紀初頭の古墳とおもわれる。第二号古墳は、第一号古墳の北西約一〇〇メートルの丘陵頂部に位置し、内部施設は、礫床上に置かれた割竹形木棺と推定される。埋葬主体の周辺からガラス小玉一七三一点、滑石製白玉九点、須恵器片、鉄器片がみついている。ガラス小玉の色調は、青紫色、青色、紫色、黄緑色、黄色など多彩である。五世紀末の築造とおもわれる。第三号古墳は、大型の竪穴式石室を内部施設としている。石室は、長さ四・五メ

メートル、幅約三メートルの大型の長方形の墓墳の中に、河原石を使ってつくられており、内法の大きさは、長さ二・七メートル、幅一・二メートル、深さ一・二メートルである。西願寺C地点、D地点遺跡でみつかった石室の構築法と共通する特徴をもっている。石室床面には、玉砂利が敷かれ、その上に組合式木棺が置かれていたものと想定される。石室内から鉄鏃形鉄製品一、大型鉄鏃四、鉄鏃二六、劍身一、刀子状鉄製品一、棘六、鉄斧一、鉈二など特異な形の鉄製品が出土したほか、石室内に落ちこんだ状態で土師器はじき（長頸壺、高坏など）がみつかった。土師器には底部に穿孔のあるものがあり、石室上での供献祭祀に使われたものである。五世紀後半につくられた古墳と考えられる。

安佐北区上小田古墳は、標高約三〇メートルの丘陵上に位置し、組合式箱式石棺を埋葬施設としている。石棺は、側石各一枚、両小口各一枚、蓋石一枚の五枚の切石でつくられており、床には砂利が敷かれている。棺内から鉄劍二、鉄刀一、鉄鎌一、鉄斧一、棺外から鉄劍一、鉄斧一がみつかった。五世紀中ごろの築造とおもわれる。本村豪章「広島県安佐郡高陽町上小田古墳の調査報告」『広島考古研究』二、一九六〇年

安佐南区空長第一号古墳は、太田川右岸の丘陵先端部に位置する円墳で、直径一三メートル、高さ一・五メートルの規模をもっている。内部施設は、全長一・九五メートルの小規模な堅穴式石室で、内部から蛇行剣形鉄製品、鉄劍、鉄鏃、鏃かすがい、三輪玉みわだま、ガラス玉、滑石製有孔円板ゆうこうえんばんなどがみつかった。五世紀後半の古墳と推定される。広島市教育委員会『空長古墳群の発掘調査報告書』一九七八年

また、地藏堂山第一号古墳は、割竹形木棺を内部施設とする古墳で、なかから素環頭太刀そかんとうたち、鉄劍、鉄鎌、U字形鋤先もしくは鋤先、鑄造鉄斧、刀子、鉄鏃、滑石製有孔円板がみつかった。五世紀中ごろにつくられたものとみられる。広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業の業地内埋蔵文化財発掘調査報告』一九七七年 須賀谷古墳は、標高約五〇メートルの丘陵上に位置する古墳で組

合式箱式石棺を内部施設としており、石棺内から、六獣鏡、八乳鏡、勾玉、管玉、そろばん玉、ガラス小玉、銅

第二章 原始・古代（考古）

釧^{くし}、鉄剣、刀、鏃^{くし}などがみつかった。この古墳も五世紀中ごろにつくられたものと推定される。木村豪章「広島県安芸郡湯品須賀谷古墳調査報告」『芸備地方史研究』第三四号一九六〇年。このほか、板石で築かれた組合式石棺を主体とし、棺内から人骨、銅釧の出土した安芸区西

崎古墳や二段に掘りこまれた土墳墓から仿製の内行花文鏡、勾玉、管玉、ガラス小玉、滑石製小玉、鉄鎌などの

みつかった安佐北区恵下^{えげ}第一号古墳、竪穴式石室のなかに仿製の獸形鏡^{じゅうけい}やガラス製勾玉、管玉、小玉、鉄刀、

鉄剣、鉄矛、鉄鏃^{てつせき}、鉄鏃^{てつせき}、短甲^{たんこう}、馬具類の副葬されていた安佐南区三王原古墳^{さんのおぼろ}。玉井源作「山本村三王原古墳」『広島県史蹟、名勝天然記念物調査報告』第二輯一九二九年。

さらに長径一八メートル、短径一二メートルの方形墳で内部主体の割竹形木棺のなから鉄刀、刀子、鉄鏃などの

出土した高陽町真亀第一号古墳、あるいは箱式石棺のなから短甲、鉄斧、鉄槍、鉄刀などのみつかった安佐

南区白山^{はくえん}第一号古墳や割竹形木棺と箱式石棺の二基の主体をもち鉄鏃、鉈、ノミ、鉄鎌、鉄斧、鉄刀、砥石などの

出土した安佐南区権地^{ごんぢ}古墳^{広島市教育委員会『九郎杖遺跡・権地遺跡発掘調査報告』一九八四年}なども五世紀代の古墳とおもわれる。

これら太田川流域の五世紀代の古墳は、規模、副葬品などからみて四世紀代の古墳と大きな差は認められない。他の地域では、この時期には、農業生産力の向上とともに古墳は大型化し、副葬品も質・量ともに豊富になってくる特徴をもつこととは大きな違いである。これは、太田川流域の農業生産力の低さから強大な権力をもった支配者の出現がむずかしかったことによるものと推測される。そして、五世紀後半には、太田川流域を含む広島県西部一円^{あきのくに}（安芸国）では、三ツ城古墳をつくり出したような西条盆地を基盤とした政治権力の支配のなかに組みこまれていったものとおもわれる。

三ツ城古墳の出現

三ツ城古墳^{みつじょう}は、東広島市西条町御蘭宇に所在する。低い丘陵の先端部を利用して築かれた広島県最大の規模をもつ前方後円墳で、全長は八四メートルである（図2-4-6）。後円部は径が五二メートル、高さが一三メートルあり、その頂部に三基の埋葬施設が築かれている。第一号主体は石

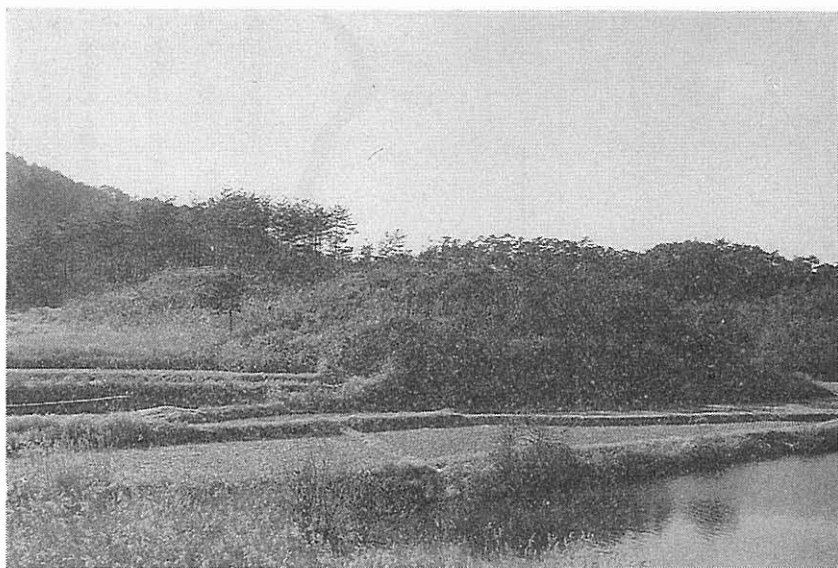


図2-4-6 三ツ城古墳（東広島市西条町）

槨のなかにつくられた箱式石棺で、棺内から人骨（女性）、珠文鏡一、勾玉一、管玉一、棺外から鉄刀二がみつかった。第二号主体も石槨のなかに箱式石棺が築かれており、棺内から人骨（男性）、勾玉一、丸玉一、銅釧一、竹櫛四、鉄刀一、刀子一が発見されている。また、第三号主体は、箱式石棺で、中から勾玉一、丸玉一、棗玉一、鉄剣二、鉄鏃が出土し、棺外から鉄矛、鉄鏃がみつかった。墳丘は葺石で覆われており、墳丘上や造り出し部には円筒埴輪列がめぐり、後円部頂部には、家形、水鳥形、鶏形、馬形などの形象埴輪類がめぐっていた。北側の造り出し部では、円筒埴輪で方形に区画した内側から、土師器（坏、高坏、丸底埴）や須恵器（坏、大型器台、甕）などがみつかった。墓前祭祀のための祭壇が設けられていたらしい。

このように三ツ城古墳は、県最大の規模をもち、出土遺物や外部施設からみて、安芸国一円の支配者の墳墓と考えることができ、被葬者として「阿岐国

「造」を想定する見方が有力である。広島県教育委員会『三ツ城古墳』広島県文化財調査報告第二集、一九五四年。

須恵器と横穴式石室の移入

古墳時代の住居は、弥生時代と同様、低い台地の上や自然堤防上につくられた竪穴式住居が多かった。多くの農民は、こうした竪穴式住居に住んでいたが、一部の豪族は、家形埴輪や家屋文鏡にみられるような高床の家や周りを壁で囲った切妻や入母屋の家に住むようになった。数戸ないし一〇数戸が集まって一つの集落を構成していたとおもわれるが、三次市松ヶ迫遺跡や広島市安佐南区毘沙門台遺跡のように一〇〇棟ちかくの住居からなる「丘の上の団地」といってもよい大きな集落も出現

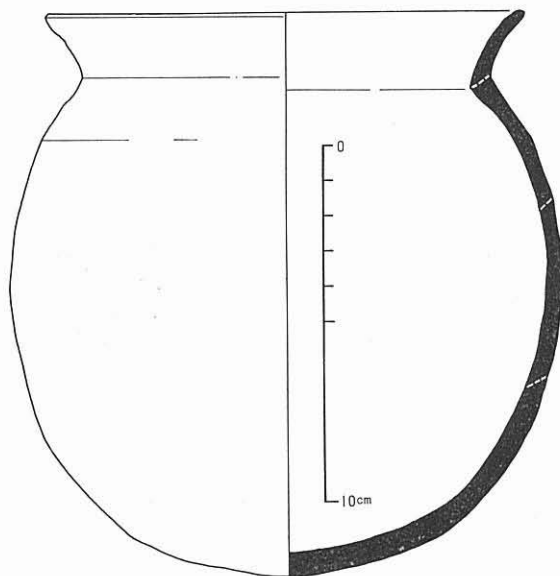


図2-4-7 岡遺跡出土の土師器



図2-4-8 岡遺跡出土の土師器

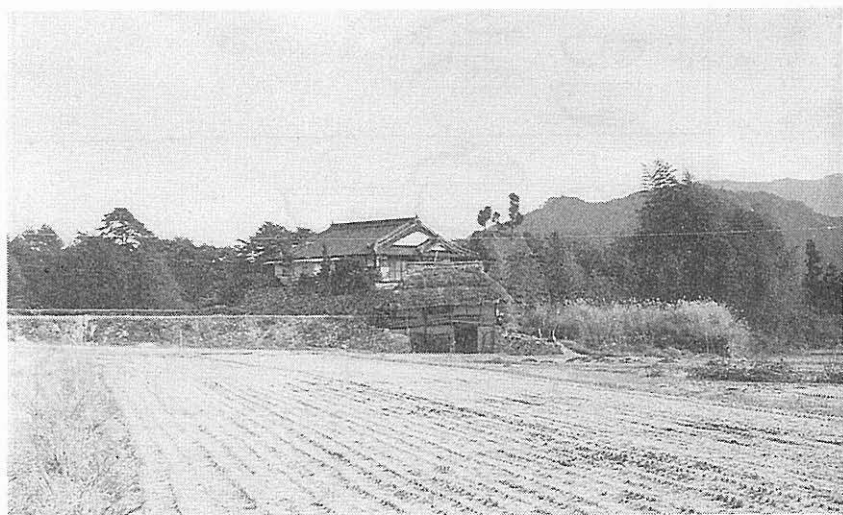


図2-4-9 岡遺跡（中央家の後方一帯）

した。集落では、政治的な支配者のもと、農民が共同して稲作や灌漑工事、古墳の築造などといった土木工事を行っていたが、そのなかで須恵器を製作する人、ガラス玉などの玉類をつくる人、鉄製武器や農工具を作ったり修理する人、さらには海岸ちかくの集落では、塩づくりをする人など専門の工人も出現し、生産活動の協業と分業の区別が一層明確になってきた。

熊野町内では、古墳時代の集落跡の明らかな例はないが、初神地区の岡遺跡では、古墳時代はじめての土師器（図2-4-7、8）や地山を掘りこんだ堅穴などがみつかったおり、付近に数戸の家からなる集落が存在したとおもわれる（図2-4-9）。

こうした古墳時代の人々の生活も五世紀後半に大陸から横穴式石室の構築法と須恵器の製作技法が移入されると墓制や人々の日常生活に新たな変化をもたらしてきた。横穴式石室の採用は、それまでの堅穴式石室や箱式石棺のように一人一墓の埋葬法と違って家族墓的な複数の埋葬法に加え、石室内に数人、多いときには一〇数人の遺体を追葬す

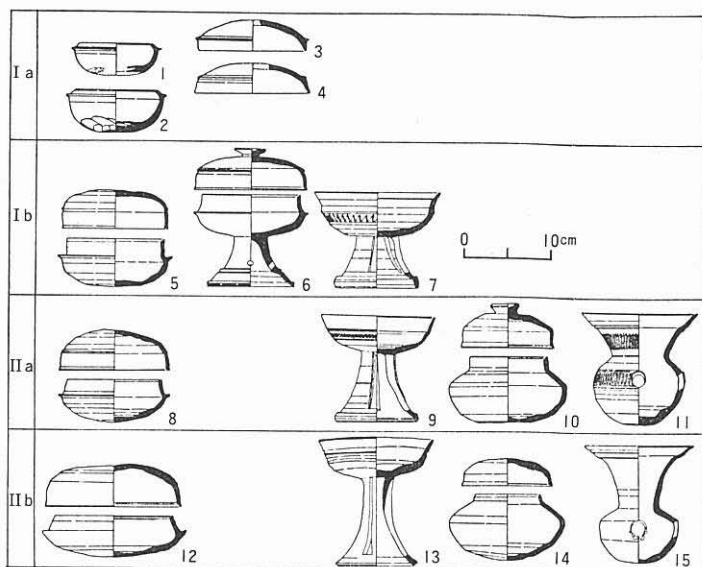


図2-4-10 須恵器の移りかわり(『龍岩・古保利・上春木』1976年より)

はじめた。その後は、土師器はもっぱら煮炊き用、盛りつけ用、祭祀用として利用され、須恵器は、貯蔵用、一部盛りつけ用の道具として使われるようになった。もちろん祭祀用としても使用されており、六世紀中ごろすぎになると装飾須恵器、器台などが横穴式石室の副葬品として墓前に供献されるようになった。そして六世紀後半

ることを可能にした。古墳の形も大型の前方後円墳はしだいに消滅し、代って直径一〇数メートル前後の円墳が主体となってきた。墳丘上で行われていた祭祀も、石室の入口部で行うようになってきた。また、須恵器の製作技法の移入は、それまでの素焼きのもろい土師器に代り、貯蔵・供膳用の器として革命的なものとなった。須恵器は、ロクロを用いて成形し、斜面に築いた窯あながまの中で高い温度で焼成したもので、堅固で割れにくい器であった。この須恵器の製作技術は、朝鮮からの渡来人によって伝えられたものといわれ、わが国では、まず大阪南部の地域で生産が始まった。須恵器は、はじめは、ごく限られた豪族層の器であったが、六世紀になると、ほぼ全国各地で製作されるようになり、古墳の副葬品としても広く普及した。

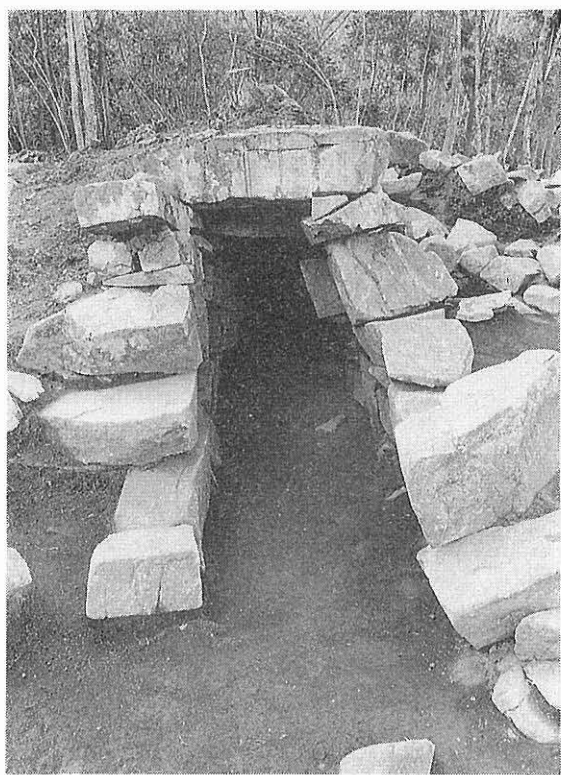


図2-4-11 横穴式石室（高田郡高宮町）

になると、須恵器も地域的な特色が顕著になり、器形や口縁部のつくり方などに変化をもってくる（図2-4-10）。人々の日常生活と切っても切れないかわりをもってきたのである。

広島周辺の横穴式石室古墳

広島周辺における六世紀前半の古墳は、直径一〇メートル前後の小型の円墳で、埋葬施設として箱式石棺や小型の堅穴式石室をもつものが多い。しかし、六世紀

中ごろ以降になると、横穴式石室（図2-4-11）を内部施設とする古墳が増え、丘陵上や丘陵斜面、山麓部などに分布するようになり、群在する場合も多くなってくる。広島市安佐北区の可部古墳群は、七〇基以上に及ぶ古墳からなるが、古墳は、いずれも直径一〇〜二〇メートル。高さ二〜四メートルの円墳で、ほとんどの場合、埋葬施設は横穴式石室である。副葬品も玉類（勾玉、管玉、ガラス小玉、切子玉など）や耳環（じかん）といった装身具をはじめ、鉄製武器、馬具、土師器、須恵器などの葬送儀礼用の遺物が増え、権力を象徴するような宝器的な遺物はみられない。これはそれまで地方の有力豪族に限られていた古墳の被

第二章 原始・古代（考古）

葬者が階級社会の進展とともに古代家族の主要な構成員（家父長層）にまで及んできたことをしめしているといわれている。近藤義郎『佐良山古墳群の研究』一九五二年

太田川流域における横穴式石室古墳としては、前記の可部古墳群のほか、広島市安佐北区真亀第三号古墳、平野古墳、東区惣田古墳、安芸区北尾古墳、千古古墳、安芸区新宮古墳、安芸郡海田町畝観音免古墳群、西谷古墳群などがある。いずれも直径一〇メートル前後の円墳で、埋葬施設の横穴式石室からは、鉄製品（刀、剣、鏃、馬具類）や装身具類（耳環、玉類）とともに須恵器、土師器などの副葬品がみついている。須恵器では、葬送儀礼用の儀器（仮器）として製作された小型の土器や皮袋形提瓶などの異形の須恵器も出土している。

熊野町では、いままでのところ古墳は確認されていないが、以前には、新宮に東米山古墳が存在したといわれている。また、出来の大歳遺跡では、内面に青海波の印目文のある須恵器片が出土しており、町内に古墳が存在している可能性は強い。

古墳の終末

各地でさかんにつくられた古墳も七世紀中ごろ以降になると急に減少してくる。これは、大化改新の薄葬令（大化二年、六四六年）に象徴されるように、古墳をつくることが規制されるようになったとみられている。さらには、六世紀の中ごろ朝鮮半島から伝来した仏教の普及と火葬の採用も、この一因となったとおもわれる。各地の豪族は、これまでと違った新しい宗教を積極的に受け入れ、古墳をつくるのに代って氏寺を建立しはじめるようになってきた。それまで古墳がしめていた権威は、もはや過去のものとなり、古墳をつくる意義は失われていったのである。そしてまた、この時代における生産力の拡大と安定は、地方の豪族たちの地位を保障し、やがては中央の天皇を中心とする国家官僚機構の中に組みこまれていったのである。